

↓神戸市の消防指令センター司令室で日本の消防・危機管理について見学するジョセフ・R・マシューズ長官 撮影：Carolyn Fleisher
 →東京で開かれたシンポジウム「ニューオーリンズから東京へ——ハリケーン・カトリーナの経験に学ぶ」では熱心に聴衆に語りかけた 撮影：高木あつ子



ジョセフ・R・マシューズ●サザン大学(ルイジアナ州)を卒業後、30年に及ぶ緊急事態対応のキャリアの大半を、ニューオーリンズ消防局に奉職。危険物監理ユニット、救助隊、消防隊等の隊長などを務め、最近では特務課(大規模イベント等オペレーションを要する任務を担当)の隊長を務めた。2005年3月より現職

ハリケーン災害からの復興へ 日米の経験を交換する

Joseph R. Matthews

ジョセフ・R・マシューズ●ニューオーリンズ市緊急事態準備局長官

ハリケーン・カトリーナがもたらした未曾有の被害から1年。ジャパンファウンデーション日米センターは、日米両国の災害復興に関わる政策と実践を充実させることを目的に、復興の途上にあるニューオーリンズ市を中心とした被災地から、関係者8名を日本に招へいしました。その1人、ニューオーリンズ市の緊急事態準備局長官ジョセフ・R・マシューズさん。一見して、消防・危機管理を長く担当されてきた風格があり、なおかつ優しさあふれる穏やかな目が印象的でした。訪れた防災関連施設や復興現場では、少しでも多くを学ぼうと熱心に見学され、予定時間が過ぎてしまったほどです。

特に神戸市の消防指令センターで司令室の席に座られたときは、日頃の職場と同じ雰囲気を感じた。地がよかつたのか、生き生きとしていらつしやいました。また東京での公開シンポジウムでは、ニューオーリンズの被害の実態と、現在もおおその途上にある復旧・復興の課題等について熱く語られました。ニューオーリンズの経験を多くの人に伝え、そして活かしてほしい、そんな強い思いを感じました。

滞在中はハードな日程であったにもかかわらず、「疲れは休めばとれる。それよりも私は、帰国後ここで得たことを、さらなる災害対策として活用していかなければならない」と語り、帰国したマシューズさん。災害復興・防災という日米交流の新しい分野で、再びお目にかかることになりそうです。

(岸本純子)